

# 「羅生門」は〈愉快的小説〉

——三好行雄の「羅生門」論再考

山下真史

はじめに

「羅生門」は大正四年一月号の「帝国文学」に柳川隆之介名義で発表された。よく知られたことだが、芥川は発表後、三年あまり過ぎたころ、この作品について次のように回想している。

それからこの自分の頭の象徴のやうな書齋で、当時書いた小説は、「羅生門」と「鼻」との二つだった。自分は半年ばかり前から悪くこだはつた恋愛問題の影響で、独りになると気が沈んだから、その反対になる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快的な小説が書きたかつた。(略)その発表した「羅生門」も、当時帝国文学の編輯者だつた青木健作氏の好意で、やつと活字になる事が出来たが、六号批評にさへ上らなかつた。のみならず久米も松岡も成瀬も口を揃へて悪く云つた。それから自分の高等学校以来の友だちの中には、一体自分が小説を書くのが不了見なのだから、匆々やめるが好いと意見の手紙をよこした男さへ

みた。

——「あの頃の自分の事(別稿)」大正八年一月、「中央公論」

ここでいう〈恋愛問題〉は、周知のように吉田弥生との破談のことだが、芥川は、その問題で沈んだ気を晴らすために、〈なる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快的な小説が書きたかつた〉<sup>1</sup>と云い、そうして書き上げたのが「羅生門」や「鼻」であると述べている。また、右の文章で、芥川は、発表当時、文壇からは完全に黙殺され、友人には酷評されたと述べているが、評論家は必ずしも黙殺していたわけではなく、〈ネオロマンチックなちよつと変つた味のものであつた<sup>1</sup>〉とか、〈一寸面白い短篇であつた<sup>2</sup>〉というような肯定的な批評もあつた。友人の批評については確認しようがないが、おそらくその通りだつたのだろう。

「羅生門」を論じる際に、この芥川の回想をどう扱うかは論者によつて別れる。三好行雄は、後述するように、この回想を〈信じがたい<sup>3</sup>〉とする立場を採り、「無明の闇——「羅生門」の世界」<sup>4</sup>(以下、

三好論と略記する)では、「羅生門」を(最初の傑作)と呼び、(存  
在悪)を描いた深刻な小説として読む論を展開した。三好論は、今  
から四〇年以上前のものだが、強い説得力があり、この小説の読み  
方に長く影響を与え続けている。しかし、そもそもこの小説は芥川  
の意図通り(愉快な小説)として出来上がっていて、しかも当時の  
評者が言うように(一寸面白い)程度の小説なのではないのか。こ  
れまでも、三好論に反対する論文が多く書かれてきており、新しい  
読み方も多く提出されているが、この小説を傑作でないと論じたも  
のではないようである。本論は、改めて三好論を再検討することを通  
して、この小説の等身大の姿を明らかにしようとするものである。

### 一 三好論の骨子

まず、三好論の骨子をまとめてみよう。  
小説の冒頭近くに次の一節がある。

どうにもならない事を、どうにかする為には、手段を選んで  
ゐる違はない。選んであれば、築土の下か、道ばたの土の上で、  
餓死をするばかりである。さうして、この門の上へ持つて来て、  
犬のやうに棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば  
——下人の考へは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やつとこ  
の局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、何時までたつて  
も、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないといふ  
事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつける為に、当  
然、その後に来る可き「盗人になるより外に仕方がない」と云

ふ事を、積極的に肯定する丈の、勇気が出ずにあつたのである。  
(引用は、三好論と同様、初出本文により、適宜ルビを省略した)  
三好は、下人が生きるためには盗人になるしかないと分かつてい  
ながら、それをためらうのは、(禁忌の感覚)があるからであり、そ  
の感覚が根ざしているのは(人間としての最後の倫理)、あるいは(超  
越的なモラル)だと言う。また、羅生門の楼上で、死体の髪の毛を  
抜く老婆を目撃した下人が、(はげしい憎悪)を感じ、(許す可らざ  
る悪)だと思つたという箇所を引いて、(下人の直感の内部に動いた  
のは明らかに、法を超えた超越的な倫理)であると云う。三好によ  
れば、この小説は、下人が(許す可らざる悪)と感じていた感覚や、  
(超越的な倫理)を超える論理を見つけることが主題となつてい  
るのである。この論理を示唆するのが老婆の次のような発言である。

成程、死人の髪の毛を抜くと云ふ事は、悪い事かも知れぬ。  
しかし、こ(う)いう死(人)の多くは、皆、その位な事を、されても  
い、人間ばかりである。現に、自分が今、髪を抜いた女などは、  
蛇を四寸ばかりづ、に切つて干したのを、干魚だと云つて、太  
刀帯の陣へ売りに行つた。(略)自分は、この女のした事が悪い  
とは思はない。しなければ、餓死をするので仕方がなくした事  
だからである。だから、又今、自分のしてゐた事も、悪い事と  
は思はない。これもやはりしなければ、餓死をするので、仕方  
がなくする事だからである。さうして、その仕方がない事を、  
よく知つてゐたこの女は、自分のする事を許してくれるのにな

がひないと思ふからである。

老婆の言い分は、簡単に言えば、次のようになる。自分が髪を抜いた女は、一般的に言えば、悪い事をしていたが、それは餓死しないために仕方なくしていたことであって、自分は悪いとは思わない。同様に、自分が死人の髪を抜くのも餓死しないために仕方なくしていることであって、悪いとは思わない。女も自分が悪い事をしていたのを知っているから、自分が悪い事をしてもらって許してくれるだろう。

——このような論理を聞いて、下人は（では、己が引剣をしようと思ひまいな）と言つて、老婆の着物を奪つて逃走するのである。この論理の奇妙さは後に論じるが、三好は、ここで二人は（生きるためにしかたのない悪のなかでお互いの悪を許しあつた）と言ふ。そして、下人は、生の極限状況においては人は悪を許し合うものだ、という認識を得たことによつて、それまで積極的に肯定できなかつた盗人になる勇氣が出たと述べている。

三好は、この論理を補強するために、（飢餓の極限にあらわれる悪のかたちという一点）で接点を持つ大岡昇平の「野火」に言及する。（食人肉と死体の冒瀆との、ことの軽重にこだわる必要はあるまい。いずれも神をおそれぬ悪である）と言ひ、「野火」にあつては（神）が現れるが、「羅生門」においては、（神）は不在で、救済はなく、ただお互いに許し合うという（倫理の終焉する場所）が現れるだけだと言ふ。

続いて、三好は「野火」と比較すると、「羅生門」は舞台を昔に設定したために（読者へのダイナミックな問いかけが欠けている）と

言ひ、小説世界は（作家の立つている地平とは異つた次元に、同時代のなまなましい体臭を喪失した、閉鎖的な時空として出現する）と言ふ。それはまた、芥川が（醒めた語り手としての姿勢を最後まで崩さない）ためでもあつて、（「羅生門」の苛烈な生の葛藤は「旧記」に封じられた遠い記憶として、現代と断たれた歴史的時間のなかのドラマという印象を消せない。読者はしばしば、伝説の霧につつまれた十二世紀のものがたりしか、そこに読まないのである。）と言ふ。三好は「羅生門」が「野火」に比べると迫真性が足りないことを指摘しつつ、それは芥川があえて選んだ方法であつたと言ふのである。しかし、三好は、迫真性がないからといって、作者にとつて小説の主題が切実なものでなかつたとは言えないと考える。大正六年の短篇集『羅生門』のエピグラフに（君看雙眼色／不語似無愁）が選ばれていることから、芥川は直接は語らないが、深い愁いを持つていたと推測する。芥川は、（人間の原風景）として、（精神性をまゐるごと剝離された生の裸形）を見ていたのであり、（そのむきだしの我執はもはや罪ではなく、人間存在のまぬがれがたい石のような事実である）という認識を持っていた。それが「羅生門」の底に秘められている芥川の深い愁いだ、と言ふ。

最後に、三好は、小説の擱筆の一文が初出時から改変されたことに注目する。初出では（下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつ、あつた。）であつたのが、大正六年五月の単行本『羅生門』収録時には、その文末が（急いでゐた。）と変えられ、さらに大正七年七月の単行本『鼻』収録時には（下人の行方は、誰も知らない。）と変更されていることについて、三好は、この改変は、

芥川が小説の必然の結びを発見したからだと言う。小説の結びとしては、下人が〈無明の闇〉のかなたに放逐される最終形が必然だが、初出では、まだ語り手（芥川）は下人のその後を見ようとしており、〈下人を空無のかなたに置きざりに〉したくないと考えていた。しかし、『鼻』収録時には、芥川の虚無感が深まり、小説の必然であった一文に辿り着いたと言うのである。

\*

三好論を乱暴に要約すれば、次のようになる。芥川は、人間はもとも善なる存在ではなく、どうにもならない我執を持って生きているのだと考えている。極限状態ではそれがむき出しになり、〈凶々しく、けものじみた衝動〉に従うことになるが、人はそれを許し合って生きるしかない。「羅生門」は、人が普通持っている〈禁忌の感覚〉を持っていた下人が、極限状態におかれたことで、生きるために仕方なくする悪は許し合うしかないという苦い認識を手に入れる小説である。「羅生門」は一見、迫真性がないように見えるが、それは〈醒めた語り手〉を設定して歴史小説の形で書いているからである。この方法は、実は、芥川が見た〈人間の原風景〉、自身の〈心情の暗部〉を鞘晦しながら語るために選ばれたものであった。「羅生門」は〈下人の行方は、誰も知らない。〉と結ぶことよって、〈無明の闇〉の存在を的確に描くことに成功した。――極めて論理明晰な論で、このように読む三好が「羅生門」を〈最初の傑作〉と呼ぶのも首肯できる。ちなみに、先にも述べたように、三好は、芥川の

〈愉快な小説〉という回想については、〈信じがたい〉と言い、〈羅生門〉の世界は、恋愛の破局が龍之介の内部に開いた世界とびつたりと対応している。そのゆえに沈鬱で暗い。〉と述べている。また、三好は、〈羅生門〉が成立するために、失恋の経験は〈柔かな引き金〉であった。それは否定できないにしても、その経験がなければ、「羅生門」の世界は不可能だったとは決していえない。（略）失恋事件はいわば感傷を思想に変える契機であった。〉とも述べている。たしかに、作者が〈愉快な小説〉として書いたつもりでも、意識下に封じ込めていた感覚が浮かび上がってきたために、深刻な小説として出来上がったこともあり得る。三好によれば、芥川は〈存在することの十字架を負わされた人間の孤独な原風景を見てしまっていた〉<sup>(5)</sup>のであって、それが〈愉快な小説〉を書こうという意図を裏切って現れた、と考えているのだろう。

三好行雄の言う芥川の人間観・世界観については、首肯できなくはないが、「羅生門」は果たしてそれが反映した深刻で暗い小説なのだろうか。以下、三好の論に反駁しつつ、「羅生門」を読み直してみたい。

### 三 下人の変化

この小説の筋立てを一文で要約すれば、次のようになる。職を失い、餓死しないためには盗人になるしかないと思いつつ、ためらっていた下人が、羅生門上で老婆の話を聞いて、盗人になる勇気が出、引剝をしたうえ、町に強盗をしに行く話。――だとすれば、小説の主眼は、下人が盗人になる勇気が出る過程に置かれることになるは

ずである。下人の心情の変化、それを書くのが主眼の小説と言えるだろう。

まず、下人がどんな人間として設定されているかを見ておこう。下人は、〈永年、使はれてゐた主人から、暇を出された〉とあるが、面抱が出来ているところから見ると、おそらくは二十代の若者であろう。〈永年〉を飯に十年くらいとすれば、十代半ばくらいから真面目に勤めて、二十代半ばくらいになって暇を出されたということになる。家族については全く言及がないところを見ると、両親も妻子もないと考えるのが妥当だろうか。この下人が楼上で死人の髪を抜いている老婆を見た時の記述は、次のようである。

その髪の毛が、一本づ、抜けるのに従つて、下人の心からは、恐怖が少しづ、消えて行つた。さうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しづ、動いて来た。——いや、この老婆に対すると云つては、語弊があるかも知れない。寧ろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考へてゐた、餓死をするか盗人になるかと云ふ問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であらう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のやうに、勢よく燃え上り出してゐたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかつた。従つて、合理的には、それを善悪の何れに片づけてよいか知らなかつた。しかし下人にとつては、この雨の夜に、こ

の羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云ふ事が、それ丈で既に許す可らざる悪であつた。

この下人は、真面目な若者に見られがちな倫理的な潔癖性を持っているようで、それゆゑ老婆の行為に對して、直感的に憎悪の心を燃やし、〈許す可らざる悪〉だと感じるのである。もし、この下人が、酸いも甘いも噛み分けた人間、清濁併せ呑むような年の功を積んだ人間であつたら、このような反応はしなかつただろう。〈あらゆる悪に對する反感〉とあるところを見ても、この下人が強い正義感を持つてゐることが分かるだろう。この下人にとつて、悪は悪であつてそこにレベルの差などはないようである。ちなみに、この後、下人は、老婆が自分の勢いに押されて、〈両手をわなわなふるはせてゐることを知ると、〈安らかな得意と満足〉を得る。自分が老婆より優位に立つた、正義が悪に勝つたという思いがさうさせたのだろう。そして老婆の話が出てくる。先に引用したように、老婆は、髪を抜いていた女は、生前蛇を干したものを干魚と偽つて売つていたと言ふ。女は悪事を働いたから、死後に髪の毛を抜かれたところで許すだろうと言ふのである。老婆は、〈こういう死人の多くは、皆その位な事を、されてもいゝ人間ばかりである。〉と言つてゐるが、もちろん、それは老婆がさう考えてゐるだけであつて、蛇を売つた女が同意するかは分からないし、一般的にさう言えるかも知れない。しかし、老婆は自分の行為を正当化するために、悪はほぼ等価だと言ふのである。下人は、老婆の話を知っているうちに盗人になる〈勇氣が生まれて来〉て、次のような行動に出る。この小説のハイライ

トである。

「きつと、さうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るやうな声で念を押した。さうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面砲から離して、老婆の襟上をつかみながら、囁みつくやうにかう云つた。

「では、己が引剝をしようと思ひまいな。己もさうしなければ、餓死をする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとつた。それから、足にしがみつかうとする老婆を、手荒く屍骸の上に蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数へるばかりである。下人は、剥ぎとつた檜皮色の着物をわきにか、へて、また、く間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

〈不意に右の手を面砲から離して〉とあるが、面砲はこれまで三回言及され、下人が気にしていたことが書かれている。すでに多く議論されている箇所だが、面砲を気にするのは他人の目を気にすることの比喩であるから、この場面では、下人は他人の目をもはや気にしないようになっていと捉えることが出来る。下人は、〈嘲るやうに〉、また〈囁みつくやうに〉老婆に言い渡し、着物を奪い、しがみつく老婆を蹴倒して、走り出す。このとき、下人は弱い者いじめをするやうな快感を得ているのだろう。下人はそれまでの逡巡を止め、弱いものを倒して、果敢に行動する人間に変身しているのである。

ところで、下人の心に〈或勇氣が生まれて来た〉のは、どのような経緯なのだろうか。突然、果敢な行動者に変身したのはなぜなのだろうか。それがこの小説の肝心なところであるのだが、実は、小説中では明確に説明されていないのである。不審ではあるが、従来は、あえて説明しなかったと考え、この下人の変化について様々な推測がおこなわれて来たのである。たとえば、三好は〈蛇を切売りした女と、女の髪の毛を抜く老婆と、その老婆の着衣を剥ぐ下人と、かれらは傷ついた犬が傷口を嘗めあうように、生きるためにしかたのない悪のなかでお互いの悪を許しあつた〉と言ひ、許し合う世界、〈倫理が終焉する場所〉が現前したことが変化の理由だと考えている。しかし、小説中には老婆が下人に引剝を許していると読める記述はないし、もし、許しているのなら、〈足にしがみつかう〉とはしないはずである。女も含めて〈お互いの悪を許しあつた〉という根拠はないのである。では、下人はどのような認識に至つたのか。

下人は、〈では、己が引剝をしようと思ひまいな。己もさうしなければ、餓死をする体なのだ。〉と言う。このとき、下人は、死人の髪を抜くことの悪と、生きている人間の着物を引剝することの悪は、等価だと判断しているのだろうか。あるいは、蛇の切り売りをするのと、死人の髪を抜くことがほぼ等価だと老婆が勝手に判断したように、自分もそれを勝手に等価だと判断していいと考えたのだろうか。あるいは、さらに、悪をおこなつた人間は悪を受けるに値する、悪を一切おこなつたことがない人間は悪を受けないから、どんな人間でも悪を受けるに値する、したがって引剝は許される、という三段論法を自分の中で展開したのであるか。――下人がこの後、京の

町に強盗しに急ぐところを見ると、今挙げた三つの考えのうちで安当なのは、三つ目の考えであろう。つまり、誰でも何か悪をしているのだから、自分が悪をしても構わない。そう考え、引剝や強盗をすることを正当化したと考えるべきだろう。もちろん、この考えは、悪のレベルを考えない幼稚な考えだが、もし、下人が論理を獲得した、あるいは認識を変化させたと考えられるなら、そう考えるしかないだろう。下人は、「生きるために仕方ない状況下では、必要最低限の悪は許される」ではなく、「どんな悪でも許される」というように飛躍した考えに至り着いたと考えられる（もつとも、下人は人殺しなどをやる気はないようで、「どんな悪」と言っても、引剝、強盗くらいなのだろうが）。

ただし、これは下人が何らかの論理を得たと考えた場合である。先ほど引用した場面では、下人は「きつと、さうか。」と「念を押した」のち、老婆の答えを確認しないし、自分の論理も披瀝しないし、老婆の理屈に従って引剝をしてもいいか、とも聞いていない。この問答無用ぶりを見ると、下人は、論理に従って行動しているのではなく、ただ感情に従って行動していると考えの方が自然ではないか。

下人が変化する場面の記述をもう一度確認しておこう。

之を聞いてゐる中に、下人の心には、或勇氣が生まれて来た。それは、さつき門の下で、この男には欠けてゐた勇氣である。さうして、又さつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕へた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動かうとする勇氣である。

「老婆を捕へた時の勇氣」とは、〈許す可らざる悪〉を退治する勇氣であるが、それがこのとき一転して、盗人になる勇氣（悪をおこなう勇氣）が出て来た。下人は、唐突に正義感を抛擲し、悪人に変身しようとする。俗な言い方をすれば、正義の味方が急に悪の味方に変身するのである（ちなみに、冗語として言えば、この場面で、下人は、生きるために、老婆に弟子入りして、死人の髪の毛を鬘にして売る商売人になることを考えてもいいはずだが、下人にはそのような選択肢は一切見えていないようである）。老婆を蹴倒して物を引剝し、自分が生きるといふのは、『罪と罰』から得た発想なのかも知れないが、いずれにせよ、このような急激な心の変化は、理解しづらい。無理に説明しようすれば、次のようなことになるだろう。先に、下人が倫理的に潔癖な若者であることを確認したが、だとすれば、この下人にとって、世界は善か悪か、白か黒かというように、二つに分けられていると考えられる。善とも悪ともつかぬグレーな領域はなく、悪は悪であつて、悪のレベルなどは問題でないという単純な世界観を持っていたと考えられる。さう考えれば、下人が、正義では生きられないと思つたとたん、悪党になる決意が生まれたのも理解できよう。下人の持つていた〈あらゆる悪への反感〉は、反転して、「あらゆる善への反感」（あるいは「あらゆる悪への反感」）に移行したのである。下人の心の変化はこのようなものであつた。——ただし、普通、大人はこうはならない。このような世界観を持つて、このように変化するのは、小中学生くらいだろう。小説では、下人は二〇代半ばの若者と想定されているが、とす

れば、下人の心はこのように純粋（幼稚）だったと考えるしかない。以上のことを勘案すると、下人は、老婆の話聞いてみずからの論理を編み出したのではなく、純粋（幼稚）な心の持ち主であったので、直情的に、悪に走ったと考えるべきだろう。そして、おそらくは、老婆を蹴倒したときに悪の快感にも目覚めたのだろう。そう読めば、この小説が〈愉快な小説〉である所以も理解できよう。論理的に考えなければならぬ、他人の目を気にしなければならぬ、倫理、法律を守らなければならない——そのようなことを考えていると鬱陶しくて仕方がないので、それら善人の規範を棄てて、好き勝手に生きる悪党に変身してみたい。そのような〈愉快な〉生き方をしてみたい。「羅生門」は芥川のそのような願いが反映した、おとぎ話のような小説なのである。

#### 四 〈愉快な小説〉

三好行雄は、へいかにも唐突な類推に見えるかもしれないが、「羅生門」の読者は、大岡昇平の「野火」を想起する自由をもつ。と言。しかし、右に見たように、この小説は戦争中の食人肉のような深刻な問題に関わっているとは思えない（三好が自然とそれを想起するのは、おそらく、自身が戦時下に青春時代を過ごしていたからだろう）。（食人肉と死体の冒瀆との、ことの軽重にこだわらなければならない）と言いが、やはり、ことの深刻さは格段に違う。下人は、老婆に髪の毛を抜いていると言われたときに、（老婆の答が存外、平凡なのに失望）するが、もしこの老婆が食人肉をしていたのなら、この小説は三好の言うような深刻なものになっただろう。芥川は、

深刻な小説にすることも出来たはずだが、あえて、老婆が髪の毛を抜いて髪にするという〈平凡〉な行為をしていたことにして、それを避けたと考えるべきであろう。

この小説は、法律、倫理、人目などを気にせず、自由な行動をするようになる若者を描いたものと言えるが、それは、良識ある大人の響きを買う。三好に倣って半ば冗語として言えば、この小説の読者は、尾崎豊の「15の夜」を想起する自由をもつ。（盗んだバイクで走り出す 行く先も解からぬまま／暗い夜の帳の中へ／誰にも縛られたくないと 逃げ込んだこの夜に／自由になれた気がした 15の夜）。盗んだバイクで走り出した少年は、そんなことでもしなれば、やはりのない鬱々した思いに耐えられなかったのである。良識ある大人には非難されるが、少年が一瞬だけでも、愉快な気分を味わえたことは間違いない。下人も同様で、何れ検非違使にでも捕まるのだろうか、「自由になれた気がした」ことが大事なのである。

「羅生門」は、その意味で、良識ある大人には容易に批判される小説なのである。青年向けのリアルでない読み物、一種の痛快なおとぎ話と言えるだろう。芥川は、恋愛問題で沈んだ心を、こうした滅茶苦茶な行動をする青年を書くことによって、晴らしたかったのだろう。下人の行方を心配するのは、もちろん、野暮なことである。

芥川は、『今昔物語集』について、後年、『今昔物語』の芸術的生命は生々々々しきだけに終つてゐない。それは紅毛人の言葉を借りれば、brilliantly（野性）の美しさである。或は優美とか華奢とかには最も縁の遠い美しさである。と述べている。王朝貴族の洗練された文化を虚飾に彩られたものと見れば、『今昔物語集』を「文化」



に囚われず、自由に行動する逞しい人間たちを描いたものと見、そこに〈野性の美しさ〉を見ることは可能である。芥川は、そこに惹かれて「羅生門」などの歴史小説を書いたのであろう。実は、三好もそのことを指摘している。〈かれらの我執は、裏がえせば、生きのびねばならぬ人間の意志である。その野性を秘めた人間の生命力に、龍之介が状況を切り裂く生のバイタリテイをすこしも見ていなかった、といえば嘘になる。〉と言うように、「羅生門」は、規範を打ち破って行動する下人を書いたものだという見方が可能であることに気づいているのである。三好は、しかし、それよりも芥川の〈雙眼の色〉を重視して、この小説を論じた。しかし、〈雙眼の色〉は、「羅生門」には、直接は現れていない。愉快な「羅生門」を書く裏にこそ、〈雙眼の色〉を読むべきだったのである。愉快な小説を書く人間が愉快に生きてゐるとは限らず、その逆ということもしばしばあるのであって、芥川はまさに苦虫をかみつぶした思いでいたからこそ、愉快な小説を書いたのである。

摺筆の一文の改変についても触れておこう。三好はこの改変によつて、下人を〈無明の闇〉に放逐したと言うが、この変更によつて、小説が変わつたかと言えば、実は何も変わっていない。下人が京都の町で盗人になるのは結びの一文がなくてもたしかであつて、〈下人の行方は、誰も知らない。〉と変更したからと言つて、自首する可能性が出てくるということもありえない。改変したのは、言わずもがなのことを言つていることに気がついたからではないのか。〈下人の行方は、誰も知らない。〉は、下人が盗人になり、やがてさらに犯罪の世界に深入りしていくことを比喩的に表現したものと考

えるのが妥当であろうが、それが、この小説の内容にふさわしかつたかどうかは、疑問である。

\*

法律、倫理を守り、人の目を気にして生きることが、既成の規範に従ふこととすれば、この小説は、規範を打ち破る話である。実は、規範からの解放という主題は、芥川らの時代の若い作家たちに多く見られる主題であつた。

たとえば、明治四三年九月に創刊された第二次「新思潮」の創刊号を見てみよう。裏表紙には、児島喜久雄がニーチェの似顔絵を描いているが、ニーチェは当時、キリスト教道徳を畜群道徳と呼び、人間を小さくする社会規範からの解放を主張する本能主義の哲学者として有名であつた。創刊号所収の小説では、真賀温（小泉鉄）の「紅い花」にニーチェの影響が濃く見られる。〈僕〉が友人の忠告の手紙に返信する形式で書かれている小説で、アトランダムに引用すれば、次のような表現がある。〈僕はあらゆる欲望とあらゆる行為とを是認した〉、〈僕は欲望と耽美とを希ふと共に漂浪と脱出とを欲するのだ〉、〈道徳といふもの、道具となつてちつばけな鑄型の中にはまつて自己の統一といふことを計つて居たクラチシズムの時代や、理想とか絶対とかいふ者のうちに隠れ家を見出して強い烈しい現実から逃げ込んで、それで美しい、気高いと心得て居たロマンチシズムの時代は疾に去つて仕舞つた。〉——もちろん、実際にこのように生きることが不可能だが、このような反道徳的に生きることへ

の憧れは、若い世代に強くあつたのだろう。

もう少し後の例を挙げよう。大正五年二月に創刊された第四次「新思潮」の創刊号に発表された松岡譲の「罪の彼方へ」という戯曲である。同号には、芥川の「鼻」も発表されている。「罪の彼方へ」は、インドの鴉嘯摩<sup>おうつま</sup>の伝説を元にしたもので、おおよそ次のような話である。ある日、鴉嘯摩は先生の夫人に誘惑されるが、それを拒否したところ、先生に誤解される。先生は、鴉嘯摩を懲らしめようとして、最後の修行として百人を殺し、その指を切つて首飾りを作れと命じる。鴉嘯摩は、命令に従つて人を殺していくが、百人目に自分の母親を殺そうとしたとき、釈迦が現れて鴉嘯摩を救う。その後、先生は自分の過ちに気づき、鴉嘯摩を許すが、夫人は悔い改めることがない。最後に釈迦が再び出て来て、鴉嘯摩は「真の成道を得た」と言う。——鴉嘯摩の伝説は、百人を殺すことの罪を犯してもその彼方がある、現世的な価値観だけでは理解できないことがある、ということ語る仏教的な寓話なのだが、それをリメイクしたこの戯曲の読みどころは、享樂的な生き方が肯定されている点である。たとえば、鴉嘯摩の先生は「学問はすべての人の面を醜くする、人の肉体から心霊を奪つてしまふのだ。(略)自分の生命が段々学問に取られて行く、僕はそれが堪らない。」と言ひ、夫人は「厭だね、この人は、抹香臭いことばかり言つて、本当に気がつまつちまうわ。(略)この世に生きてゐる間は、この世の享樂が一番さ。」と言う。夫人は先生と鴉嘯摩の感動的な和解の場面においても「妾神なんぞいらぬわ」とうそぶくのである。この時代の若い世代の書いた小説を見ると、世間的な価値観に従つて生きることを否定して享

樂を求めたい、という思潮が流行していたことが見て取れよう。

この流行の理由は、ごく簡単に言えば、明治の終わりから大正初期にかけて、近代化が一応達成されたことに求められるだろう。この時期、日本は曲がりなりにも「世界の一等国」の仲間入りをしたが、それは同時に、国を挙げての至上命令であつた近代化という目標が喪われ、世代を越えて価値が共有されなくなつたということでもあつた。そうした時、若者が社会の規範に反発するようになるのは当然の成り行きである。若者は一般に既成の秩序に反発するものだが、社会全体の共通の目標が喪われた時期には、特にその傾向が強くなるのである。

「羅生門」をそのような時代の中に置いてみれば、いささか幼稚すぎるものの、社会の規範を破つて生きたいという若者の姿を描いた小説の一つとして違和感なく読めるだろう。関口安義は、芥川が中学生時代に木曾義仲論を書いていることに注目し、「龍之介は、革命にあこがれ、義仲的自由人にあこがれた熱い心をもつた青年であつたのではないか」と述べ、「羅生門」には「己を呪縛するものからの解放の叫び」があると云う。「羅生門」を「己を呪縛するものからの解放」の物語として読む点は首肯できるが、この作品には、解雇の不当を暗示させるような一節すらないし、貧困を招いた為政者への批判もない。社会革命への志向をここから読み取るのはきわめて難しい。

小説は、教科書に採られると、完全無欠の傑作のように扱われ、往々にして、そこに立派な思想や教訓があると思われがちだが、「羅生門」の前に香を焚くのはそろそろ止めるべきではないだろうか。

【注】

- (1) XY生「十一月の文壇」(『新公論』大正四年十二月)。
- (2) 青頭巾「文壇時事」(『新潮』大正四年二月)。
- (3) 三好行雄「小説家の誕生——「羅生門」まで」(初出は「解釈と鑑賞」昭和四年五月。引用は『三好行雄著作集 第二卷 芥川龍之介論』(平成五年、筑摩書房)による)。
- (4) 初出は「国語と国文学」昭和五〇年四月。引用は(3)に同じ。
- (5) (3)に同じ。
- (6) 同右。
- (7) 「今昔物語鑑賞」(『日本文学講座 第六卷』、昭和二年、所収)
- (8) 関口安義「自己解放の叫び」(『芥川龍之介 実像と虚像』昭和五三年、洋々社)。

(やました まさふみ 本学教授)

